

0歳から14歳の子どもの死亡原因で、不慮の事故は防ぎうるものです。

安全とはリスクが十分減らされた状態です。リスクとは怪我をする可能性です。その怪我のひどさと発生確率をうまく想定すればリスクを科学的に制御することが出来ます。

子どもの重大な怪我はほとんどが過去の例の再発なのです。リスクを想定して計算し制御すれば再発は防止できるはずです。

2016年12月に日本工業規格 JISZ8050「(前略)・子どもの安全の指針」が出来ました。これは子どもの重大な怪我のリスクを減らすための基本原則を述べた国際規格を翻訳して JIS規格としたものです。通称「ガイド50」と言います。

この規格には、子どもがなぜ怪我をしやすいか、怪我のリスクとはどんなものか、そのリスクをどのように減らすのかが体系的に書かれています。子どもは身体が小さいだけでなく、急速に成長して次々と新しい能力を身に付け、何にでも挑戦したがる特徴があります。周囲にあるあらゆる「もの」に関心を持ち、その「もの」が持つ危険を知らないまま思いがけない行動をとります。

「もの」の設計者はそれに子どもがどう関わるか、子ども特有のリスクがあるかは十分検討していないことが多いのです。回転ドアに挟まれたり、遊具で大怪我をした事例は、子ども特有の行動によるリスクについて「もの」の設計段階での検討不足と思われる。

リスクを減らすには「もの」の設計段階で、先ず(1) リスク要因を無くす、次に(2) 危険に遭うのを防ぐ装置を作る。それでも残るリスクについては、(3) 使う人にその内容を伝えて、使用段階でリスクを減らす工夫をしてもらう、という3つのステップを踏みます。

子どもが乗ったら落ちるような弱い蓋を作っておいて、立入防止の鍵をかけるよう管理者に伝えるという方法で施設を作ったところ、管理者が不用意に鍵を開けてしまい、子どもが乗った蓋が壊れて穴に落ちたという重大な事例がありました。これは(1)、(2)のステップをおろそかにして、(3)のステップに頼った失敗です。

子どもは何か面白いものを求めて冒険をします。使用段階での管理や注意、目を離さないでという警告などによる(3)のステップは重要ですが、それに頼って(1)と(2)のステップを飛ばしてはいけません。先に述べた「もの」には、子どもが危険に遭う要因として「サービス」なども含まれることが「ガイド50」の最新版に登場しました。

教育も一種のサービスですが、子どもの成長を図るため敢えてリスクに挑戦させること

もあり、本来リスク要因が大変多いところです。学校の行事などは、計画段階で、子どもが大怪我をするリスクを十分に探し出し、3つのステップをその順序で踏んでリスクを減らす対策を考えることが重要です。

「ガイド 50」は本来安全規格を作るための指針ですが、子どもの怪我のリスクを減らすための知恵が体系的に書かれています。子どもが危険にさらされる機会（リスク）は必ずあると考えて、そのリスクを最小にするように、関係する人々が協力できる仕組みをつくることが大切です。

「子どもの傷害（けが）の防止は社会全体の責任」と「ガイド 50」に書いてあります。この規格が広く普及して子どもの重大な怪我の防止に役立つことを願っています。多くの人々の努力により子どもの不慮の事故による死亡は、実数も減り、同じ0歳から14歳の人口10万人当たりの死亡率も減っています。このことから、子どもの人数が減ったために実数が減っているだけではないことがわかります。同年齢層の、悪性新生物による死亡とほぼ同等の死亡率となっています。まだまだ減らせると思います [図：人口動態統計から作成]。

東京消防庁のホームページから「**Stop！子どもの事故**」という冊子がダウンロードできます。どんな事故が多くどう防ぐかが書かれていて、とても有用です。

消費者庁ホームページの **子どもの事故を社会全体で防ぐために** も参考になります。

（書籍『小象の 元気！で行こう』第53話を改訂）